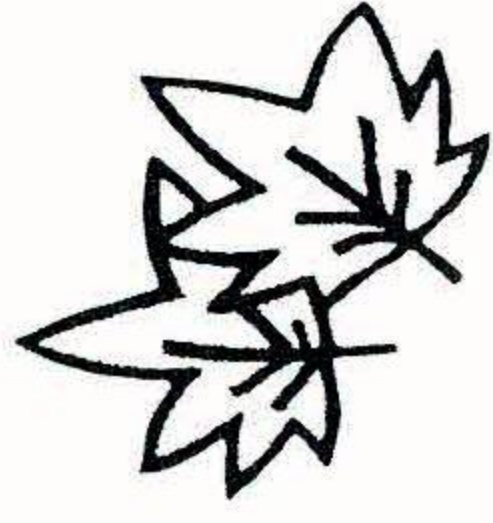


二、文化財



原の川そそさん

赤松末吉

谷川が西から東向きに流れている所に川そそさんはお祀りしてある。近くでは、芥木の川でも祀られている。

お祭りは、七月三十日に行われる。

組立て式の神殿をお祭り前に川で洗い清め、神殿を組立てて氏神様に合祀してある御神体を移して、祀り込んでい。御神体は、鏡であるとのことである。昔は、八丈川と引原川の合流点でお祀りしていたが、河川改修で場所もなくなり、現在では、部落の中、お大師さん前の広場に、幟を立ててお祀りしている。広場では、昔は、夜七時から十二時頃までもお酒が出て盛大に踊った模様である。踊りは、盆踊りと同じもので、今では、夜七時から十時頃まで踊りを奉納しているそうだ。

川そそさんは、女の神様で、下(腰から下)の病気に御利益があると言われている。病気に罹らぬようにと祈願するため、昔は、近郷は勿論、一宮方面からお参りする人が多かったらしい。現在でも、年中行事としてお祭りが続けられていて、こんな郷土色豊かな行事はいつまでも残したいものだ。

《第一集所載》

我家のまつりごと

中田光子

昭和三十四年に私は我家に嫁いで参りました。その前年に主人の父が他界されていたこともあり、信心深い母は私達二人に神仏様をお祭りする家風を厳格に伝えておきたい気持ちがあったのでしよう。色々祭りごとを教えてくださいだきました。当時の母の齢に近づいた私もその頃の日々を想い起こしながら、我家の歴史として、又、今後子供達の何かの参考になればと、我家の新年の祭礼を調べ綴ってみることにしました。

はじめに、我家にあります神仏様の祭壇を列記しますと、

- 一、仏間 御先祖様の霊を祀る仏壇
- 一、床の間 八代龍王様 他軸
- 一、中の間の神棚に福の神様 多賀大社 伊和神社 出雲大社
- 一、奥の間に年徳神様
- 一、居間に昆沙門天
- 一、台所に三宝大荒神
- 一、裏庭に大日如来様 弘権様 三社様
- 一、野外の池、井戸に水神様
- 一、お便所にさす神様

一月 睦月

元旦、午前零時を過ぎて新しい年を迎えると同時に、まず主人が若水を迎えます。戸外の井戸に(現在は水道)祀ってある水神様におふだ・小餅・重ね・串柿と栗を供え水に感謝し、今年も水の恵みがありますよう祈り、新しい水杓で三杯半の若水を新しい桶に汲みます。この行事で一年が始まります。それから屋内の御仏壇をはじめ各神棚へ同じように御灯明を上げ、重ね餅・柿・栗をすべてお供えます。特に床の間からは、土蔵の神様へ鏡餅をお供えます。これで年明けの神事を済ませ、家族そろって、八幡神社・宝殿神社・神明神社へ初詣、お参りを済ませ、家に帰るといつも午前三時ごろ、それから床に着きます。

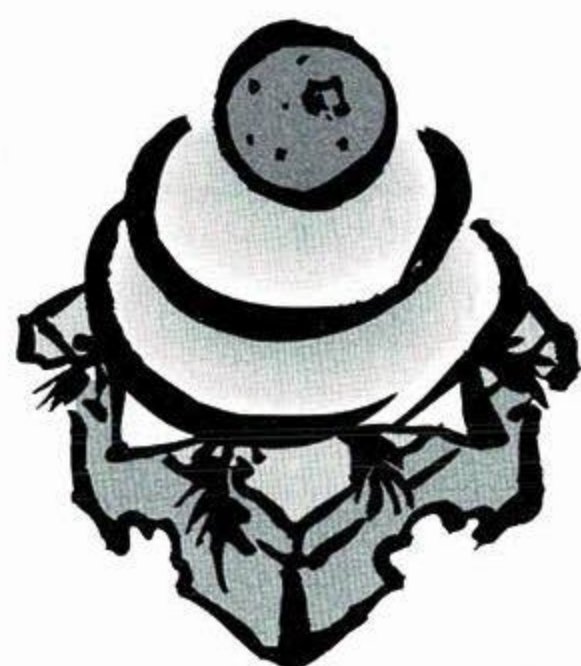
夜が明けてからゆっくりと起床し若水を使ってお茶とお雑煮を作り、御仏前と年徳神様にお供えます。それから家族全員で御節を囲みお屠蘇をいただき、一年の幸いを願い新年を祝います。お昼にはそれぞれ神棚に御飯をお供えし、夜はお灯明を上げて、三が日同じ神祭りをいたします。又、二日は

事始めて年賀状の返礼、書き初め、子供達にお年玉をあげるなど三日には谷の淡島神社へお参りします。又、お正月三が日のうち都合の良い日に村の行者山へお参りすることにしております。

四日は精進料理のお雑煮を作り、仏様と年徳神社様へお供えします。七日、春の七草雑炊をお供えしていただきます。

十一日、鏡開き、年桶をおろしお雑煮を作り、仏様、年徳神社様へお供えすることにしています。注連飾り・お神酒・お花などもおろします。

十四日、左義長(トンド焼き)。当番の隣保の人達により、前日大がかりなトンド焼きの用意がされます。当日はすすきはきをした青竹の先に年桶か



ら出したお餅をはさみこんがり焼きます。お札・お守り等もこの時に焼脚します。焼き灰を持ち帰り、畑や家の周りに少しづつまきます。作物の豊作(虫除け)と厄除けを願います。

十五日、成人の日、小豆粥を作り仏様・神様にお供えます

二十日、御大師様をお祭りします。

年に一度、隣保の御大師講のお宿が回って来ます。御大師様と愛宕様をお祭りし、一戸に一人お参りします。読経の後、雑談をしたり集金、連絡事項、相談など月一度の良き交流の場となります。

二十九日、庚申様。お豆腐・小豆で作ったもの・卵・お菓子等をお供えし、南天や赤い花を立て、お祭りします。

このように我家では新春一月の祭りごとと共に一年がスタートいたします。

《第二集所載》

チャンチャコ踊り

チャンチャコ踊りは、毎年七月三十日に、氏神様の開願祭として、踊りを奉納されている。

踊りの始まったのは、何時頃からかは判らないが、昔、何れの神の祟りか、七日七夜、天地鳴動して、暴風雨吹き荒れ、人家はもちろん、大木まで倒れてしまった。その上大洪水で、田畑が荒れ、人の命まで危なくなってきたので、氏神様に、風雨を鎮めて下さい、若しお願をお聞き下されば、氏子三人になっても、毎年踊り続けます、と一心に祈願したところ、お聞き届け下さったのか、やがて風雨も鎮まった。それで氏子の人達は、生気をとり戻した、と伝えられている。

この伝説を、代々言い伝えて来て、毎年踊りを奉納している現状である。

踊り子は、小学校六年生までの男子で、「シンポウチ」は三人が陣羽織を着て、錫杖を持ち、赤鉢巻をして、後に垂らし、藁草履をはく。「カンコウチ」は、六〜七人が、緋の着物に、襷を掛け、藁草履をはき、腰に太鼓を着ける。双方一列に並び、お互いに向かい合い、村人の歌や、鐘、太鼓、囃

赤松末吉

につれて踊る。

踊りは、「道のはた」「境の濱」「美花踊」「登中踊」「はすのたれ」「津山踊」「赤崎等」「おちご踊」の、八通りもある。

当日は、村中の家が万燈(三十三センチぐらいの細い割木)を、三把ずつ持



ち寄り、氏神様で、この万燈を焚いてチャンチャコ踊りを、奉納する。チャンチャコ踊の歌詞も追記しておく。

道のはた

ヤーサーサエツ

道のはたの竹の子

へし折れてたもれよ

いや

てもいとし

アー

山を見れば月白

ヤー

沖を見れば着く船

沖のカモに立ちよれ

ヤー

だいだの千鳥が

友を呼ぶとんぼ呼ぶ

この寺い

雨が降らいで

コイが降る降る

おちご笠着て

コイに濡れそろ

いや

コイに濡れそろ

いや

(二ノクリ)

ヤー

こなたのお庭を

今朝こそ見れば

黄金小草が

足にもつれそう(四)

いや

足にもつれそう

いや

(三ノクリ)

ヤ、ア、ア、いや、は難言葉

注(一) 沖のカモはカモメかも知れぬ。

カモにははでないか。

注(二) 寺いはへの訛なまったものらしい。

注(三) コイは肥コエであろう。

注(四) もつれそうはもつれ候そうろうであるう。

塚さかいの濱はま

ヤーサーサエツ

塚(五)の濱を

通りて見れば

あら美しく

しげのぬりつば笠よ

ありよ買うて

殿の土産にしよう

ヤー

土産にしよう

(一ノクリ)

塚の濱を

通りて見れば

あら美しく

しげの白木しじまきの弓よ

ありよ買うて

殿の土産にしよう

ヤー

土産にしよう

(一ノクリ)

ヤーサーサエツ

塚の濱を

通りて見れば

あら美しく

しげの足どりの駒よ

ありよ買うて

殿の土産にしよう

ヤー

土産にしよう

(三ノクリ)

注(五) 塚は大阪の塚かどうか、考

えていない。

引歌

深山みやまのしの竹も

茂ればおそろい(六)

おれらも殿御とのごと

寝てほそろ(七)

いや

寝てほそろ

いや

注(六) おそろいやは恐ろしやであら

う。

注(七) ほそろは判らぬ。

美花踊みはなおどり

ヤーサーサエツ

ひめこまつ姫小松 姫小松

風にもまれし姫小松

一ノクリ

ヤーサーサエツ

小たかに一夜の

宿をかす

いや

宿がよければ

名も立たぬ

いや

宿がよければ

名も立たぬ

ハリヤ

ヤーサーサエツ

川柳

水にもまれし

川柳

いや

蛭(八)に一夜の

宿を貸す

いや

宿がよければ

名も立たぬ

いや

宿がよければ

名も立たぬ

ハリヤ

ヤーサーサエツ

道柴みちしばが

道柴が

道柴が

駒にけられし

道柴が

いや

露(九)に一夜の

宿を貸す

いや

宿がよければ

名も立たぬ

いや

宿がよければ

名も立たぬ

ハリヤ

ヤーサーサエツ

カ

注(八) 小タカは原本通り発音もコタ

引歌

十七、八なら

いそなもしゆめば

いや

諸国のなびけが

出て招く

いや

出て招く

いや

登中踊となかおどり

ヤーサーサエツ

あの沖中の

二つの鴨ちぎが

契ちぎりをこめて

はなれをやましよ(九)

はなれをやましよ

恥ずかしながら
羨しのお姫そろん

ハリヤ 一ノクリ

ヤーサーサエツ

茂りたる

深山をかき分け行けば

お姫油火が

細ぼそと

見えそろん

ハリヤ 二ノクリ

ヤーサーサエツ

二人の親の

おしやれし事にや

何とて姫は

寝ぬぞとおしやる

夜なべする

油火と云うて

殿御を持ちそろん

ハリヤ 三ノクリ

ヤーサーサエツ

しようや

じようや

鳴りて

東も白んだ

起きて戻りゃれ

こちの殿御様

ハリヤ 四ノクリ

注(九) はなれをやましよは判らぬ。

引歌

深山のしの竹も

茂ればおそろいや

おれらも殿御と

寝てほそろ

いや

寝てほそろ

いや

はすのたれ

ヤーサーサエツ

殿に参りて

はすのたれに

池掘らしよ

池掘りも

ろくじにも

ばんばのそり橋

かけさして

ヤーサーサエツ

その橋の下に

四千艘の

船を寄せ

三千の米を

積ませそよ

今西風を

お待ちやる

ヤーサーサエツ

長者の方を

行た程に

八ッ橋つくりを

建ていやと

よい日のよい時に

ちようのう始めを

なされそよ

ちようのう船を

なされよと

ヤー

八ッ棟つくりの

御棟上げの

御祝いに

長イの丁子に

ちごの杯

今受け始めるめんめたや

今受け始めるめんめたや

今受け始めるめんめたや

注(十) 原本通り

注(十一) 原本通り

注(十二) 長イの丁子は長柄の銚子で

あろう

津山踊

ヤーサーサエツ

津山踊りは

おんどろよ

ハリヤ

おんどろよ

ハリヤ

おんどろよ

ハリヤ

ヤー

津山の山を

今朝出て見れば

唐舟が 三艘が

イヨ イヨ

着いた先なる舟に

イヨ

何をかア積んだ

銭米積んで 帆を上げて

津山の踊りは一踊り

津山の踊りは一踊り

ハリヤ 二ノクリ

中なる船に

何をか積んだ

白金黄金

揃えて積んだ

白金延べて 帆柱に

津山の踊りは一踊り

津山の踊りは一踊り

後なる船に

何をか積んだ

綾千反 綿の千反

唐糸、綿 数知れず

イヨ

イヨ

イヨ

イヨ

イヨ

イヨ

イヨ

イヨ

イヨ

イヨ

津山の踊りはこれ迄よ

津山の踊りはこれ迄よ 四ノクリ

注(十三) おんどろよは原本通り

赤崎等

ヤーサーサエツ

こなたの殿様

赤崎ナダは赤崎ナダは

石田公に御座る

進術なされよ

川旅を 川旅を

ヤー 一ノクリ

ヤーサーサエツ

赤崎ナダは

名所とおしやる

ヤー

名所の濱で

宿とりかねて

沖こむ船で

夜を明かす

夜を明かす

ヤーサーサエツ

沖こむ船で

夜を明かしたら

蓬萊さまの

波打つ時にや

みなとの嫁ににや

ようなるまい

ようなるまい

三ノクリ

注(十四) 赤崎等は内容から赤崎灘で

あろう。

注(十五) 原本では進□なされよと

なっている

注(十六) さまかさんかははつきり判

らない。

引歌

一七、 八なら

いそなもしゆめば

いや

諸国のなびけが

出て招く

いや

出て招く

いや

おちこ踊

ヤーサーサエツ

おちごを寺い

ヤー

のぼせておいて

ヤー

おちごはお京い

ヤー

追いはせます 追いはせます

ヤー 一ノクリ

ヤーサーサエツ

おちごを抱いて

寝た夜はさまよ

三ノクリ

お船三石を

ヤー

おしからず おしからず

ヤー 二ノクリ

ヤーサーサエツ

播磨の書写山の

ヤー

おちごのかたびらの

ヤー

しんだれ柳の

腰にはなびけの

とぶところ とぶところ

いや

おんじやれの おんじやれの

ヤー

長居すれば

名もたつや

ヤー

ヤーサーサエツ

赤崎行きたれば

ヤー

津山が見える

ヤー

かりほがとぶとうぶ

ヤー

蟲やとぶ

ヤー

あれに大事の

ヤー

人の小娘 ヤー ヤー

大事の人の小娘

大事の人の小娘

大事の人の小娘なれど

行きたれば ヤー

ようして 抱いて寝やア

ヤー

行きたれば

ヤー

ようして 抱いて寝やア

四ノクリ

ヤー

ヤーサーサエツ

姉ごの 部屋を

ヤー ヤー

今朝こそ 見れば

ヤー ヤー

三尺 つづらに

ヤー ヤー

桐この まくら

ヤー ヤー

長かたびらで

ヤー ヤー

さかよる

ヤー

長かたびらで さかよる

ヤー 五のくり

注(十七) 寺いのいはへであらう。

注(十八) 京いのいもへであらう。

注(十九) 原本は柏かしわことある桐きりことう

たっている。

注(二十) さかよるは栄えるであらう。

以上記した歌詞は原本を写したものであるが、現在歌い継がれているものも、合わせて記しておく。

道のはた

道のはたの、 竹の子

へしと折れて、 たもれよ

いやてもいとし

竹の子もいとし

山を見れば、 月白ツキシロヤ

沖を見れば着舟ツボネヤ

沖のかもめに立寄れツボヤ

だいだの千鳥チトリが

友を呼ぶトモヲヨブイヤ友を呼ぶ

この寺い雨が降らいで

肥が降る降る

おちご笠カサ着て

肥に濡れそろいツボヤ

肥に濡れそろいツボヤ

こなたのお庭を

今朝こそ見れば

黄金小草オウゴンコソウが

足にもつれそろいツボヤ

足にもつれそろいツボヤ

タート、タートターカタートター

堺の浜

ヤー堺の浜を通りて見れば

あら美しげのぬりつば笠ツバカサよ

ありよ買ふて殿のヤー土産にしよツバヤ

土産にしよう

アーリヤータンタンタン(ホイ)

タカタカタンターター

ヤー堺の浜を通りて見れば

あら美しげの白木の弓ユミよ

ありよ買うて殿の土産にしよユミヤ

土産にしよう

ヤー堺の浜を通りて見れば

あら美しげの足げの駒ウマよ

ありよ買うて殿の土産にしよウマヤ

土産にしよう

引歌

ヤ深山の志の竹も茂ればおそろいツボヤ

おれらも殿ごと寝てほそろいツボヤ

寝てほそろいツボヤ

美花踊

ターカータン

ヤー姫小松、 姫小松、 風にもま

れし姫小松

ヤーカンカンカン

小たかに一夜の宿をかす

イヤ宿が良ければ名も立たぬ

イヤ宿が良ければ名も立たぬ

ハリヤタンタンタンターター

ヤー川柳、 川柳、 水にもまれし

川柳

蛭ヒルに一夜の宿をかす

イヤ宿が良ければ名も立たぬ

イヤ宿が良ければ名も立たぬ

イヤ宿が良ければ名も立たぬ

ヤー道柴が道柴が駒ウマにけられし

道柴ミチグサが

ヤー露ツルに一夜の宿を貸す

イヤ宿が良ければ名も立たぬ

イヤ宿が良ければ名も立たぬ

引歌

ヤー十七、 八ならいそなも

しゆめば、 いや諸国のなびナけが

出て招マツくいマツや、 出て招マツくいマツや

登中踊

カンカンカン

ヤアあの沖中の二ツの鴨カモが

ちぎりをこめて離ワれをやましマシよ

はづかしハズカシながら羨うらやましの

お姫おひめそろん

ハリヤツンタカタカタタートター

チンカラコく、 チンチン

カラコチンカラコチンカラコトテ

イヤタカタカタタートター

ヤア茂りたる深山をかき

分け行けば下お姫の

油火アヒが細々と

見えそろん

ヤー二人の親のおしやれし事にや

何とて姫は寝ぬぞと、 おしやる

夜なべする油火と云ふて殿御を

待ちそろん

ヤアしようや、 じようやなれて

東も白シラんだ

起きて戻れやこちの殿様よ

引歌

ヤー深山のしの竹も茂れば

おそろいやおれらも殿御と

寝てほそろいツボヤ寝てほそろいツボヤ

イヤタカタカタタートター

はすのたれ

ターカタン

ヤー殿に参りいはすのたれに

池掘イケウチらしよ

イヤ池掘りも、 ろくじにも

ばんばばんばのそり橋掛ハシカケけさして

そり橋の下に

イヤ四千艘コウの舟を寄せ

三千の米を積ませそよ

今西風をお待ちやる

今西風をお待ちやる

タカタタート、ターアタンタンタン

くくく

タカタートー、ターアタンタン

タカタートタンタカカカ

タンカタト

タカタタカタンタカタンタカタ

タトタトタカタト

ヤー長者の方を行た程にや

八ッ棟作りを建ていやと

ヤーよい日のよい時に

ちようの始めをなされそよ

ちようの始めをなされそよ

ヤー八ッ棟作りの御棟上の

御祝に、長いのちようしに、

ちごの杯今受け治める、めんめたや

今受け治めるめんめたや

タカタートターンター

タカタートターンター

津山踊

津山踊オンドロヨハリーヤオンドロ

ヨ

ヤー津山の山をイヨ

今朝出て見れば

ヤー唐船舟がイヨ 三艘イヨ着いた

ヤー先なる舟にイヨ 何をか積ん

だ

イヤ銭米積んで帆を上げて津山踊り

は一踊り

タカタートザランザラン

タカタートザランザラン

タカタートザランザラン

タカタートザランザラン

タカタートザランザラン

タカタカカカ

ヤー中なる舟にイヨ 何かを積ん

だ

ヤー白金黄金オイヨ そろへて積ん

だ

白金延べてイヨ 帆柱に

津山の踊りは一踊り

ヤー後なる舟にイヨ何をか積んだ

ヤー綾千反オイヨ 錦の千反

ヤー唐糸、綿はイヨ 数知れず

津山の踊りはこれまでよ

津山の踊りはこれまでよ

赤崎等

タンタカタン

ヤーこなたの殿様 赤崎かよい

ヤー赤崎等はヤ 石田公に御座る

ヤー進術なされよ川旅を ヤー川旅

を

ヤー赤崎等は ヤー名所とおしやる

ヤー名所の浜で ヤー宿取りかねて

ヤー沖こむ舟で ヤー夜を明かす

ヤー夜を明かす

ヤー沖こむ舟で ヤー夜を明かした

ら

ヤーほうらい様の ヤー波が打つ

ヤー波が打つ ヤーほうらい様の

ヤー波打つ時にや ヤー港の嫁にや

ヤー波打つ時にや ヤー港の嫁にや

ヤー波打つ時にや ヤー港の嫁にや

ヤー波打つ時にや ヤー港の嫁にや

ヤー波打つ時にや ヤー港の嫁にや

ヤーようなるまい ヤーようなるま

い

引歌

ヤー十七、八なら いそなも

しゆめば いや諸国のなびけが

出て招くいや、

おちご踊り

タンタカタン

ヤーおちごを寺いヤ のぼせておい

て

ヤーおちごは、お京へ

ヤー追せませ

ヤー追せませ

ヤー追せませ

ヤーおちごを抱いてヤー

寝た夜は様よ ヤー夜舟三石

おしからずヤー おしからずハリー

ヤ

ヤー播磨の書写寺のおちごの

かたびらの かたには なびけの

しんだれ柳や、 こしにはなびけの

とぶ所 いやとぶ所

いやおんじやれの ヤーおんじやれ

の

ヤー長居りやすれば ヤー名も立つ

や

ヤー赤崎 ヤー行きたればヤ津山が

ヤ見えるや かりほがヤ飛ぶ

ヤ見えるや かりほがヤ飛ぶ

ヤ見えるや かりほがヤ飛ぶ

ヤー虫しや飛ぶヤ あれにや大事の

ヤ人のヤ小娘ヤ大事のヤ人の小娘

ヤー大事のヤ人のヤ小娘ヤなれど

ヤー行きたればヤようしてヤ

抱いてね ヤ行たればヤようして

抱いてね

ヤターシツカラカッカラヤー

ヤー姉御のヤ部屋をヤ今朝こそ

ヤ見ればヤ三尺ヤつづらにヤ

柏のヤ枕ヤ長かたヤびらでヤ

さかよる 長かたヤびらでヤ

さかよる

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ

ヤターシツカラカッカラヤトテ



《第一集所載》

飛石伝説

河野 トミエ

皆様ご存知のように牛谷修三先生が集落の小字や地名などをお調べになっておられます。それが今回丁度齊木地区になりましたので、先日ご無理を言っ
て連れて回って頂きました。牛谷先生も『飛石字』の所にお書きになる事と
思いますが、村の人より聞いた飛石伝説について書かせて頂きます。

場所は中村地区の中央で、船積商店のすぐ上の所です。普段は何度も通っていたのに杉垣の続きになっていたの



で気がつかなかったのですが伝説の石やお不動様がお祀りしてあることを知りました。

齊木で一番高い山に大甲山があります。その大甲山の八号目辺りに行者山が祀ってあって、行者山のことは小林盛三先生が「ふるさと伝説」に詳しく書かれておりますが、その行者山から石が飛んで来たという言い伝えです。

ある日庄屋さんに「屋敷の裏の篋の中に石が落ちているから探すように」とのお告げがありました。庄屋さんはすぐに働きの男衆に探すようにいって探させてみますと、いつもは見なかった石が落ちていました。不思議に思い拾い上げて別の場所へ移しておいた所が朝になると又元の場所に納まっていた。それで、ああこれはお告げのお不動様の化神だろうと考えて落ちていた場所にお祀りされたそうです。石の落ちていた所は、昔の旧家で庄屋さんでもあった飛石嘉右衛門さんの屋敷跡です。嘉右衛門さんという人は旧西谷村の第七代目村長さんをされた方です。

大正五年頃の火災で此の庄屋さんの

付近は大火となり、庄屋家も焼けてしまつて其の後は他の土地に移転されたので、焼けるまでは庄屋家で祀っておられたこの石も暫く祀る者が跡絶えていました。

再び昭和二十六年頃より近くの飛石常太郎さんが祀られていたが、現在は昭和五十二年に建てられた祠に飛石文雄さん達飛石家株内の守り本尊様として、隕石のような石と、飛石不動尊を祀られて毎年一月三日をお祀り日と決め丁寧にお祀りしておられます。祠の中に祀ってある石は黒っぽい丸い石ですが、此の祠の側には大きな石があつて不思議なことにはこの石の回りにだけ子篋が生えていて他には広がっていません。篋の中の石というのはどの石だったのでしようか・・・この篋の名は正しくはわかりませんが庚申篋だと聞きました。これと同じ篋で他の場所に生えているものでは籠が作り易いので籠篋という人もいます。

石が飛んで来たというのは何時の頃かは定かではないが、氏姓名などのつかない頃だったのか、それより後の明治維新の改革で、石が飛んで来た由来に因んでその付近の地名や氏名にも飛石という名が付けられたのではないかと考えられます。

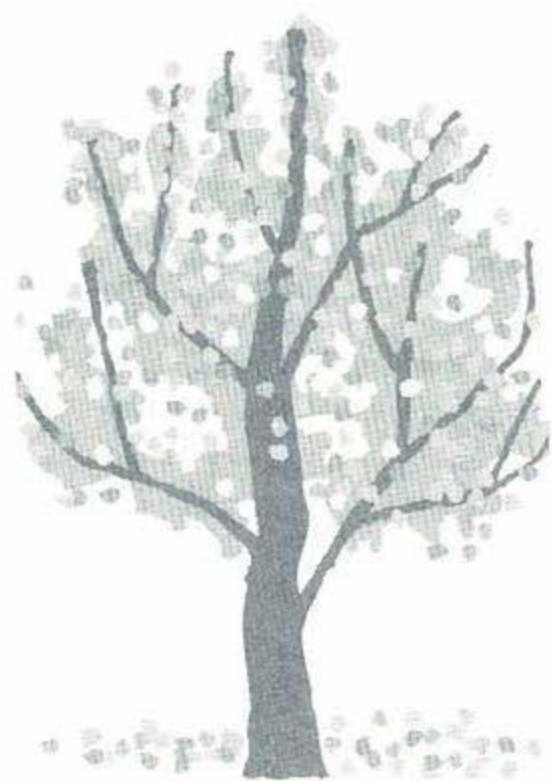
この不動様の近くには若宮様という水の神様もありお稲荷様をお祀りして



十二月十五日をお祭り日とし、近所の人達でお守りをされ田畑に豊作の水の恩恵をうけておられます。

落ちて来たという石の側に立って見上げてみますと丁度真上に行者山が見えました。

《第二集所載》



水谷明神社の獅子舞

大成 みちよ

昭和六十一年八月二十八日に、町指定の民俗芸能として保存されるようになった水谷部落の獅子舞について、区長様、保存会の人達から聞いたことを記載いたします。

村祭りは毎年ありますが、獅子舞を舞うのは隔年で、十月の第二日曜日の午後一時頃より明神社境内広場で行われます。

目的は、五穀豊穰と家内安全、無病息災を願って氏神様に奉納します。

獅子舞の歴史ははっきりしませんが、古老の話によると、水谷の獅子舞は明治十八年頃には本村〔上野〕部落の宝殿神社で盛んに舞われていました。

氏子である水谷の若者達が獅子舞を習い覚えてから、上野と水谷とで交互に舞うようになりました。特に宝殿神社では相撲が大変盛んになりました。

明治三十八年頃からは水谷だけで舞うようになり、「水谷の獅子舞」という言葉があるように、昔はかなり熱心に稽古をされていたようであります。行事の次第として、先ず宮入りがあ

ります。

そこで全員が勢揃いしたあと、道払いの天狗を先頭にして、お多福、獅子、子役の順にお宮に向かいます。

途中、獅子は、笛、太鼓に合わせて道引きの舞を演じます。

次に石段を上り社殿に着くと、神社の周りを右廻りに三回廻ります。

そして神主様より鈴と御幣を受け、鈴を鳴らしながら頭を三回上下して礼拝をします。

次に刀を受けて右手に持ち、三回空を切って邪気を払い清めて儀式が終了します。

それから石段を上り、広場で道引きの舞を演じたあと、座に獅子頭を納めて、宮入りが終わります。

戦中、戦後の混乱期に一時中断したこともありましたが、経済復興と共に氏子中より復活しようといった声が起こり再開したもので、町の無形文化財の指定を受けたことを機に、全戸加入の保存会を結成しました。

演目、衣装、用具、所作も昔のままに伝承しています。

獅子頭をはじめとして面などの損傷

が激しいのですが、年間、町より三万円の助成金は支給されているものの新調は甚だ困難とのこと。

伝承には高度の技が要求されるし、村の若者が少なくなり、練習や費用の面などでも保存上の問題が多いそうで、住民の考え方や価値観が多様化してきた今日、伝統ある獅子舞をどのようにして伝えていくか、大きな課題となってきています。

演目には五種類あります。

屋 島Ⅱ(構成)

使い手二人、江戸腹、股引き、黒足袋。子役四人、男子が化粧、女性用長襦袢、白足袋、神社の紋入り鉢巻き、タスキ、シデ棒、日の丸扇子、牡丹花。

(所作)

子役が持った牡丹花を欲しがらる獅子、それを扇子で見せたり隠したりする。からみつく獅子をシデ棒でからかいます。

毬取れⅡ(構成)

使い手は四人で、屋島と同じ。天狗



(所作)

お多福の持つ毬を獅子が取ろうとする。見せたり隠したりしながら、ユーモアたっぷりにかからうが、遂に取

は一人。天狗用衣装は、面、黒足袋、下駄、ササラ、スリ棒。お多福は一人。派手な綿入り着物、水色帯、白足袋、面、細い割

られて天狗と二人で大騒ぎをします。

法螺返しⅡ(構成)

使い手、四人、子役2人、屋島と同じであるが、ササラと短いシデ棒が必要で。

(所作)

荒獅子と言われるように猛々しい。飛び跳ねる動的所作でひっくり返ったり、又、静的所作もあります。子役は獅子と同じ所作をします。

花掛かりⅡ(構成)

使い手は二人で、屋島とおなじですが、牡丹花をつけた椿の木が一本必要です。花持ちは一人。法被、鉢巻き。

(所作)

牡丹の花を取ろうと用心深く接近して、飛びつき、飛び退く獅子。花を喰って荒れ狂い、遂に花びらを天に向かって吹き上げます。この芸は最

高度に次ぐ技であります。

剣の舞Ⅱ(構成)

使い手は二人で、屋島と同じであります。太刀が必要で。子役は二人、これも屋島と同じであります。

(所作)

清め獅子とも言われます。前使は太刀を持って子役と切り合います。後使いはぬたをうったり、蚤を取る様子など芸が細かいです。この芸は、最高度の技の舞であります。

このように、水谷の獅子舞は、町無形文化財に指定されましたので保存会を中心にして大切に保管状態に注意を払い、大切な古典芸能として伝承されています。

《第五集所載》

安賀宮坂の庚申さん

河野 トミエ

旧宮坂道を安賀八幡様の鳥居の西よ

り一〇〇米余り上った所に庚申様がお祀りしてあります。平成四年にお堂は新しく建て替えられて立派な庚申堂になっております。『波賀町誌』に拠ると、

「安賀の旧宮坂道にある庚申堂は、波賀町にある庚申信仰を示すものである。波賀町では庚申さんの夜に、猫が交わるとも言われている。」とあります。

庚申信仰は、人の身体の中に三尸の虫がいて、庚申の夜、睡眠中に抜け出し、天に上って天帝にその人の罪科を報告します。そして罪の軽重によって生命を短縮されるといわれ、この夜は(六十日に一回ある)徹夜して修業するので。

三尸の虫とは、「上尸は、人の頭に居て目を悪くし、顔の皺を作り、髪の色を白くする。中尸は、腸の中に居て、五臓を損わし、悪夢を見させ、飲食を好む。下尸は、足に居て命を奪い精を悩ます。」といわれています。

しかし、庚申の日に徹夜して三尸の名を称えれば、災い転じて福となすと

されています。

庚申の本体は、はっきりしませんが、帝釈天と言われている、その神使は猿といわれ、庚申の申をさると読むことから三猿(見ざる、言わざる、聞かざる)が結びついて、庚申の夜は身を慎み、女を避ける俗習ができ上がったものでしょう。このことから、「庚申は、せざるを入れて四猿なり」、「庚申を明るる日聞いて嫁こまり」などという川柳もある。」などと記されています。

安賀庚申様は

祭 神Ⅱ庚申様で青面金剛鬼神(帝釈天)であり、

神 使Ⅱ猿田彦命

容 姿Ⅱ二眼六臂逆髪という。身は青色、髪は火炎のように逆立ち、目は赤く、身に蛇をまとって一匹の邪鬼を踏まえ、六つの臂に剣・弓・矢・矛・宝・珠を持って、人や家畜の体内の三尸の虫の病から救って願いを聞いて下さる。安賀の信仰篤き福沢さんに頂いた書き物によると、庚申とは怒りを鎮めることなり、父母に尽くすはこれ孝

心という。

御神徳に敬神の対象は先ず、天神・地祇・八百萬神

主 神に道祖 猿田彦大神 天孫瓊々尊降臨の際、猿田彦大神天の八衢に「道別の神」といって出迎え、風貌雄大超絶した神威を以ってつつがなく天孫を高千穂の峰に御導き申し上げ、肇國の礎を成した大神なり。猿田彦大神は往古より天照皇大神と幽契による御旨を地上に実行される。

地祇の根本の神に即ち地球上に生きとし生けるものの平安と幸福を招く「みちびきの祖神」として、地鎮祭、

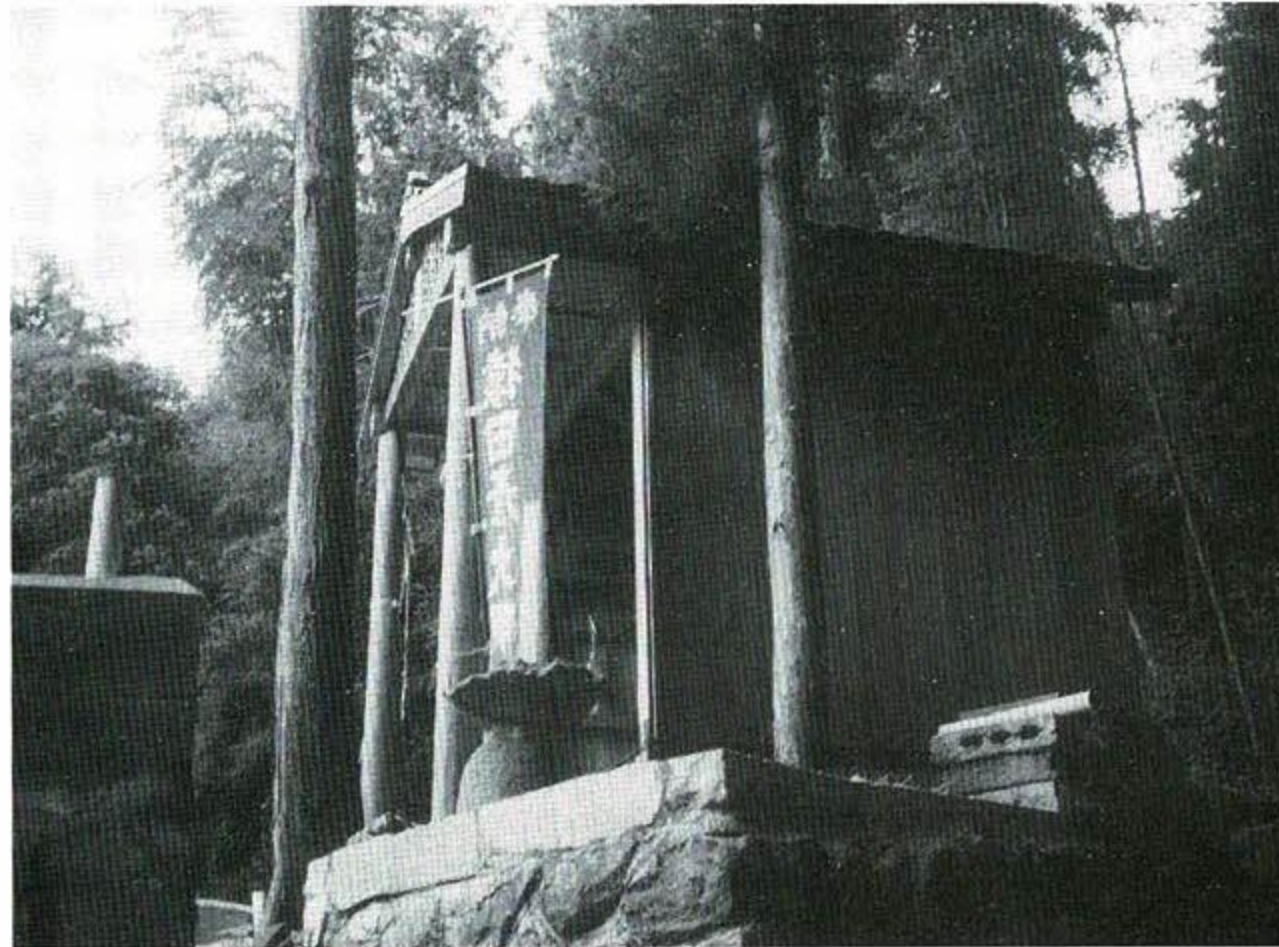
方災解除、家屋敷、国土の御守護の靈験あらたかなり。又の御名を「興玉の神」と称え奉り、神々の御霊を奪い興す導きの神として、先達、延命、長寿、縁結び、安産の御神徳あらたかなり。

また大神は、「道祖の神」として人類はもとより、地上に生命あるもの「かくあるべし」と教え論し、家内安全、無病息災、交通安全、警備開運の神として崇敬をうけております。大神は、

その広大無辺の御徳に因んで亦の名を「大行事権現」「衢の神」「土公神」「佐田彦大神」「千勝大神」「精大明神」「塞神」「大地主神」「岐神」「白髭大明神」「山の神」「供神の神」「庚申様」「道別大明神」「棒大明神」と称えられ、警視庁に警察守護神として奉斎されて

います。

神孫「行満大明神」は修験神道の元祖として、「役の行者」を導かれた事蹟など古来「行の神」として「神人帰一」修業達成守導のあらたかな神として古来より尊信されております。このように崇高な神様として記されております。



庚申日

庚申さんは、六十日二カ月目に一回なので安賀地区の近くの人たちによってお祀りされております。

さえのきさん

また、宮坂道の齊木に近いところに道祖神の小さな祠があり、昔はわらじなどがよく下げてあったと言われます。こうした祠は、足の神様として旧道の峠とか村の境の辺りに祀られていたようです。齊木と千種との峠や有賀から飯見へ越す峠にもあったそうです。昔の旅人が峠で休み、そこにかけてあるわらじをもらって取り替えていったものだろうと思うと聞きました。また、足の痛い人などもよくお参りしていたといひます。

旧宮坂道

この道は今は通る人もなく、新しい道が出来てからは、木の枝が落ちたり草も生え込んで、荒れていて通れなくなっていると思います。安賀に近い下の方は、地元の方達が畑に行かれるので道も少しは手入れをされて、自動車も軽四は通れるようになっております。

昔は村役場も農協も安賀地区にあって、齊木部落の二〇〇戸余りの人達は車もない時代で歩いてばかり、この道が交通の主干道で、多くの人が行き

来たものです。特に戦時中は、齊木

からの出征兵士を八幡様から見送り、兵隊さんの祈願のためには村中の人がお宮参りに日参したものです。子供達の学校道は少し上の山の中に別にありました。私も若い頃に仕事の関係で朝と晩と昼食に帰り、一日四回は毎日通った道ですが、大きな宮の森に続き、杉や檜の木立ちに囲まれ、木の根っこが道の中に石段のように出ていて、道の両側は上も下も墓がずらりと並んでいて、中程の曲がり角は丁度「く」の字形に曲がり、上下の道が見えなくて、曲がり角の端は竹藪で深い溜め池があり、昼でも薄暗く、それはそれは寂しい山道でした。その下の方に庚申さんが祀ってあります。そんな宮坂道での恐ろしかった思い出・・・

ある晩のこと、仕事の都合で遅くなり、暗くなったので隣の井口さん宅で提灯を借りて一人で帰っていくと、丁度庚申さんの所まで帰った途端に提灯の灯がパタリと消えて真っ暗になりました。その瞬間髪の毛は、ゾウッと逆立ち、身動きも出来ないような、何ともいえない恐ろしい気分になりました。マッチなど持っていないし、私は仕方なく真っ暗な道を手探りで何とか家に帰りました。あの時の恐ろしかった思いは忘れる事はありません。よく家まで帰ったものだと思ひ出す

と寒気がするようです。

宮田貞藏さん

当時、宮坂道を通ると宮田貞藏さんというおじいさんによく出会っておいりました。そのおじいさんは、日露戦争に行かれた方です。体格のいい元気な老人でした。宮田さんは戦争に行っていた時の手柄話を会おう人に良く話されておいりました。日露戦争で乃木大将と一緒にいたと言っていて、ある時の戦いで宮田さんが「乃木さんやりましょう。」と言って戦ったとき、大勝利だったと良く話されたので、「乃木さんやりましょう。」のあだ名のついた有名なおじいさんでした。宮貞さんが亡くなられてからも四十五年だそうです。あの世でも、「乃木さんやりましょう。」と言っておられることでしょう。

今は学校道も宮坂道も変わり、お宮さんへお参りするの舗装された良い道に変わっておいります。先日、何十年振りか山の中の古い道を少しの距離だけ通ってみますと、庚申様も立派なお堂に建て変わりお祀りしておいりました。ふとあの恐ろしかった時は、獣にでも襲われたのかもしれないと思いいました。

以上の文は、「安賀旧宮坂道の庚申堂」を参考にしました。

《第五集所載》

お盆にまつわる諸々の行事

中岸 幸大

一 お盆

お盆とはご先祖や仏になられた霊をわが家に迎え、いろんなお供物等で供養する仏教行事である。

約一週間から十日前頃から墓地の清掃（七日盆までに）をしたり、仏壇の塵を払い、仏具も磨いたりする。

八月の十三日の夕方から十六日（十五日までの所もある）までとか、一般にはお盆の期間である。

二 盆棚

盆棚のことを精霊棚または先祖棚ともいう。盆の間のお精霊さんのための特設の祭壇のことである。

盆棚は十三日の午前中に設営するのが普通だが、初盆新盆の家では、もつと早くから盆棚をつくる。季節的な生花を立てて飾りつけたり、季節の野菜等供えて準備する。

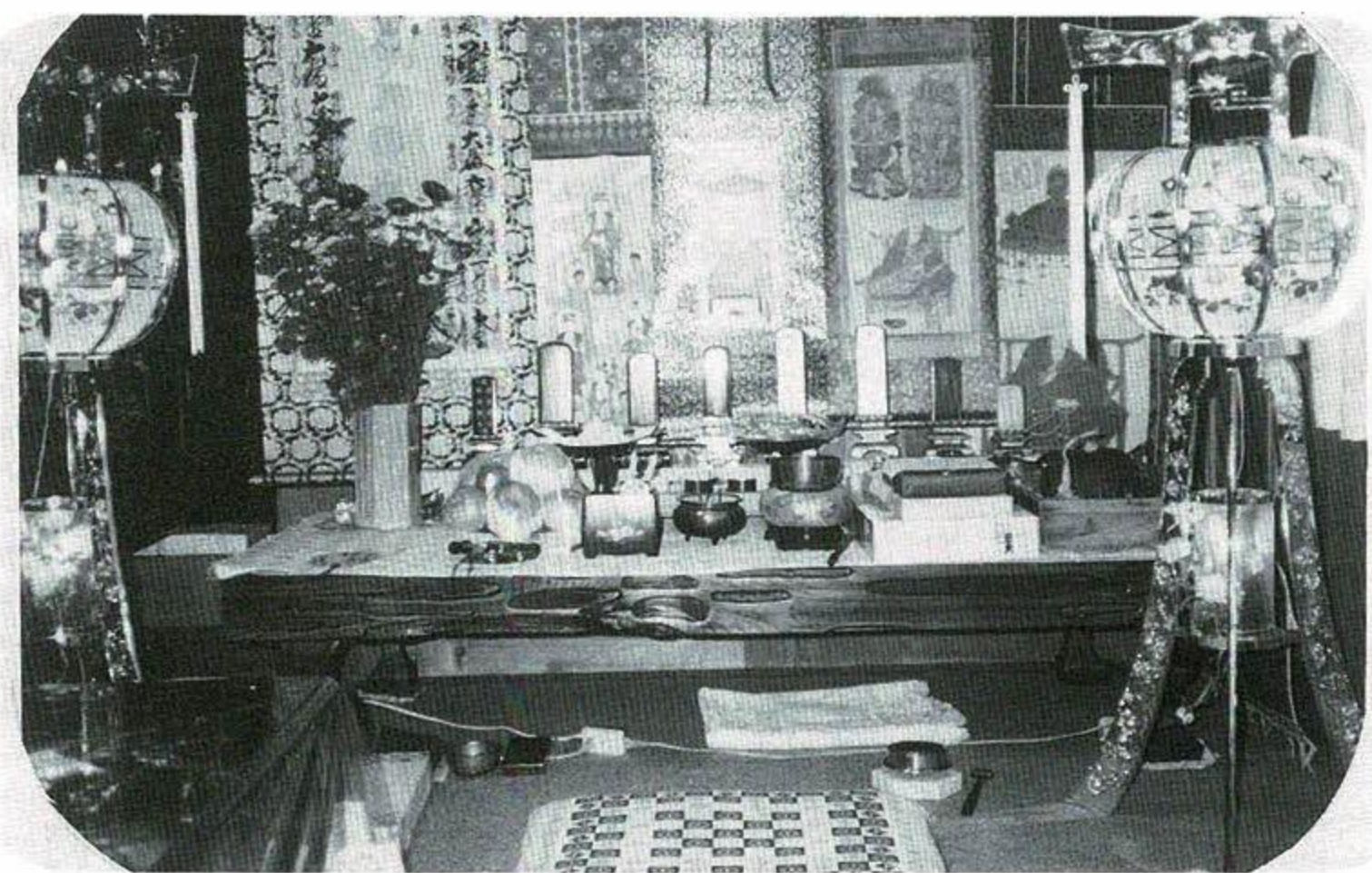
初盆の家は親戚や近所、また親交の深い人々からお供物等が寄せられるので、早くから盆棚をつくって飾りつけるのである。

仏壇の外に盆棚をつくるので、仏壇の中は霊が空になるわけである。しか

し、留守をお守りするお精霊さんがおられるという考えから、仏壇にも従来と同じようにお供物をしてまつる家が多い。

三 精霊迎え火

お精霊さんの迎え火は十三日を宵盆、



または迎え盆と呼んで、夕方から杉、松、おがら等焚きはじめるのが普通である。迎え火を焚く場所は川筋、四辻、家の前とか門口、六地藏前、墓の前等である。

迎えたいまつをする所や家々では十三日に杉や松を薪にして墓の前で焚き、その火をろうそくに移して持ち帰り、仏壇や盆棚の燈明とする所もある。

目には見えないご先祖様、仏様を背に負うまねをしたり、足を洗うまねをしたりして迎える作法もある。

お精霊さん達を迎え入れると、すぐにお供えをする。落着き団子（落着き粥）はお盆のご先祖さん達に早く落ち着いてほしいという願いの表れである。外におはぎ、柏餅、赤飯、茄子、胡瓜、西瓜、南京、柿、さつまいも等の季節の野菜や果物も供える。お精霊さんは「初物食いだ」という考えもひそんでいる。

また茄子に割り箸を四本刺して馬を作り、お精霊さんがこの馬に乗って来られて、また乗って帰ってもらおうようにするという考えや風習も残っているところもある。

また三尺さげを「おいこ」に見立てて、供えた物を背負うて帰ってもらおう意味で供える家もある。

また、縁づいた人や濃い親戚からは提灯をお供えする。これはお精霊さん

が迷わずに我が家に入れるように明るく照らすためだと言われている。

それから、欠かさないうように気をつけているのが「水」か「お茶」で、水かお茶を入れる器を用意して供えている。茄子か胡瓜を細かくきざんだものを、蓮の葉か里芋の葉にのせて供えている家もある。これも水代わり、お茶代わりで、もしなくなったら、これでご辛抱下さいという意味も含んでいる。

四 墓参り

十四日の朝、家族揃って先祖の墓参りをする。いろんなお供物と同時に、たっぷり水を供えたり、かけたりする。細かくきざんだ茄子や胡瓜を蓮か里芋の葉に入れて供えられている墓もある。これも前述した考えに基づくのである。我が家の盆棚にお精霊さんが来られていると考えるならば、お墓参りも空になるわけだか、やはり、お墓参りして、お供え物をする。これはお精霊さんの留守見舞いということになる。これでも墓に残っておられるお精霊さんがおられると考えられるからである。

墓参りが終わると、本家や濃い親戚の盆棚へお参りする。特に初盆の家にお参りする人が多い。近所の人や隣保内の人が申し合わせて、お参りするという傾向が慣例化している地域や集落もある。

五 盆踊り

盆踊りはその地域集落のご先祖の皆様を供養するための踊りと考えられる。(取材記録集No.4に記載されているので、ここでは省く)

六 生ぐさ物

お盆の間は生ぐさ物(魚貝や肉類)を食べないという風習も残っているが、食生活や生活様式の変化の中で、そのような考えも薄れてきている。

七 精霊流し

十六日の朝、地域や一部の隣保や家によっては、十五日の朝、または十五



日の夕方、家族全員が盆棚の前に座り、お経をあげたあとで、お供え物を籠に入れ、鈴を打ち鳴らし、般若心経を唱えながら、川の流し場で杉、松、おがら等で火を焚き、線香やろうそくをたてて、懇ろにお経をあげる。

その後で麺類、ご飯、おにぎり、団子、弁当や野菜類等を川に流す。その時に自分の体の悪い所をなでたりさったりしてお精霊さんに持って帰ってもらう。我が身を守ってもらうための願い事である。これを精霊流し(精霊送り)という。

この時にお精霊さんの「腹持ち」がよいように強飯(赤飯)を握り、弁当を

作るが、寿司、豆御飯、団子等を入れて弁当を作る家もある。

また家によっては、舟を作って流されることもある。蓮の葉や里芋の葉を舟代わりにして、盆の供え物を積んで流すところもあった。

しかし近年では、精霊流しも時代とともに内容も意味も地域や家々によって少しずつ違ってきている。川の水質汚染、環境美化等の観点から簡素化されてきた。従って魚等が食べる麺類、ご飯、団子等を流す程度の傾向が多くなってきた。

八 しまい盆

精霊流しが終わった午前中に、盆棚を片付け、仏壇を元通りに収め直す。これがしまい盆である。これで盆が終わったことになる。

九 川原飯

私が子供の頃、地域によって有る無しはあったと思う(雨天、増水は中止)が、盆の十六日に川に流したお精霊さんのお供物等を子供達が拾い集めて手を加えそれに塩を入れて煮たおじや(雑炊)をつくり、食べたものである。これは夏病みをしない「まじない」だと言われてきた。これが川原飯である。雑炊はもともと、神仏への供え物のおさがりをいただくという考えから広まっ

たようだ。そのために米や野菜等が入り混じっているのである。お盆の供え物をありがたく頂戴して食事として頂くことよって、我が身や家族を守ってもらおうありがたい食事という意味も含んでいるのである。今でも家によっては十六日の昼食時や夕食時に雑炊を食べる家もあるとしたら川原飯の名残りと考えるのは考えすぎだろうか。

十 藪入り

お盆や正月には奉公人が休暇をもらって、生家に帰ることを藪入りという。奉公人はお手当や交通費、土産物等を頂いて、三日ほど生家に帰れた。また、お嫁さんが実家へ里帰りをするのも當時としては慣例となっていた。藪は草深いところという意味で、都会から草深い田舎に帰るという意味である。即ち、都会風の商家の間に発達した「ならわし」である。奉公人やお嫁さんの藪入りは、時代の変化とともになくなってきたように思う。しかし、働くためには誰しも休暇、休日が必要である。十六日は野良仕事や山仕事にも行かないで、昼寝をしたりして体を休める休養の一時であった。今も残る盆節季、盆勘定などの風習は、各家庭、業者、商売人等の間では重要な一つの区切りである。

十一 施餓鬼

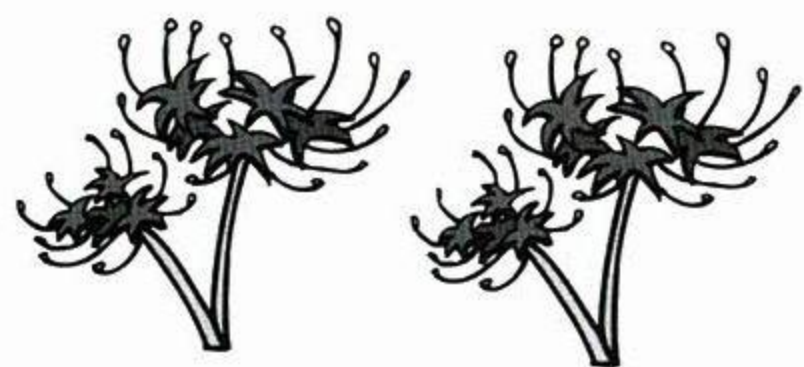
お盆には私達のご先祖様を祭るだけでなく、突然の不幸で死んだり、祭ってくれる子孫のない「たましい」も同時に慰め、それらのたましいがああ世で幸福であるように、また、この世の人々に「わざわざい」をしないように供養する。それが施餓鬼である。盆の十三日に、家々の軒先に高さは地面から三尺から四尺位で、左右には竹の花立てにしきび等を挿し、小さな棚を作るのが例となっていた。これが施餓鬼棚で無縁仏のためのものであった。胡瓜や茄子、団子等が供えてあるのを私達の子供の頃にはよく見受けられた。今、小野では、お堂（六地藏）で八月十六日午後からお寺さんに来て頂き、村主催（区長がまえで）毎年施餓鬼供養を行っている。お経をあげて頂き、ありがたい説教を聞いて一時をすごすのが恒例となっている。これらの施餓鬼供養等は、古くからの地域の人々の先祖や無縁仏への優しさ、慈しみの現れでもあると思う。

十二 中元

もとを正すと、一月十五日を上元、十月十五日を下元、そして七月初旬から七月十五日までを中元と呼んだ。これは中国の暦から学んだもので、正月前の歳暮に対して、この時期の贈り物

を中元（盆歳暮または盆供）という。顧客先や恩顧を受けた人々（家）への物品の贈答を意味していた。この中元に贈る物は、以前は衣料や履物の外にそうめん、うどん、白米、米の粉、菓子果物等が広く贈答品として用いられていた。盆棚にこれらの物も供えられた。しかし、今は商業ペースに乗せられ随分とバラエティーに富んできた。最後になりましたが、聞き取り調査にご協力下さった町内の方々、安賀の満願寺住職様のご指示、「ふるさと歳時記」発行の中山暁尚様の資料も参考にさせて頂きました。ここに、それぞれの方々へ深く感謝申し上げます。

《第六集所載》



浮雲神社（若宮さん）

河野 トミエ

この浮雲神社の祠は齊木中村地区の飛石長次郎さん宅の裏の畑にお祀りしてあります。灼かなる水の神様として若宮さんと呼ばれ親しまれております。この若宮さんは中村橋に注ぐ飛石たにごの谷川の水にかかわりのある田圃や生活権のある人達十四、五軒によって祀られております。

お祭は一年に一回、十二月十五日が祭日であり当日は、甘酒を作ったり色々なお供物をして二、三人が一組となり交代で当番に当たられます。

お祭以外は飛石長次郎さん宅の奥さんがお花を立てたりしてお世話をしておられます。

昔は近所の子供達が相撲をとったりしていたのですが今はありません。当社浮雲神社の由来は、信徒である飛石文男さんに同伴して頂き祠を開けて見せてもらいますと中の板に書いてありました。

由来

「抑当社ハ自今昔三百六十六年前ノ勸請ニシテ本村字千保ニ浮雲神社アリテ浮雲集ノ靈ヲ祀ル。則其弟ノ靈ナリ。」

時天ニ早ヲ損ナフヲ免ルル、此由緒タルハ、今ヲ去甘六年慶応二年中、飛石佐太郎ノ家ニ於テ書ヲ発見ス、既に祭式ヲ廢シタリシヲ、起シテ、祭日ヲ定メテ執行ス、此神社。
社ニ祈リテ早魃ヲ免レシヲ数度ニシテココニ勸請以來早魃ニ罹リシヲ聞カヌ、氏子ハ凡テ此谷水ヲ以テ養フベキ田地ヲ作ル者態信徒トナリテ当社ヲ維持ス。」
齋奉建換浮雲神社

五穀成就養水安全祈処

維持明治二十四年

辛卯十二月十五日鎮座

神官 小林盛繁

世話人

飛石 嘉右エ門

飛石 松蔵

飛石 佐太郎

外信徒十二戸

このように記載されている所によりますと、現在の若宮さんは明治二十四年に祀られそれからでも百十年程は経っておりませんが、それより以前二十六年も前から祀ってあったものを廃しとありますから、中村に祀られるようになってからでもずい分古くからですが元の千保の浮雲神社は五百年も前から祀っているのではないかと思われませんが私



の計算も確かではありませんので間違っているかも知れません。

この信徒である近所の方々か丁重にお祭りされている若宮さん。あまり多くの人達には知られておりませんが、いつまでもお祭が続きますようお祈り致します。

《第七集所載》

ザンダカ踊り

大成 みちよ

古くから道谷地区で伝承されているザンダカ踊りについて、お話を聞きたいと思いましたが、昭和十七年に大火があり記録が焼失し、何も残っていません。

お話を下さった人は、還暦を迎えて二年。青年の頃、地区内の長老よりザンダカ踊りをきびしく教えられたことを思い出し、同年配の人たちと、最近小学生に教えておられますので、いろいろと語ってもらいました。

このザンダカ踊りは、昔、疫病や餓死、それに貧困でこまっている人達のために、神様に祈願し、村人たちが毎年その願開きのために踊ったものです。音頭とりは古老が受け持ち、踊り手は、成人した者が受け持ち、丁度元服の儀式にかなった行事でした。

毎年、青年たちが聞き覚えで唄い出し、長い唄になったり、又口伝えのため歌詞が抜けたりして、踊り手が困ることもありました。ザンダカ踊りは、踊り手が六名、しんぱち、うちわ持ちが二名、一列にならびます。その後音頭とりが並びますが、音頭とりの人数は決まっております。

しんぱちの音頭によって踊りを始めます。唄い手は、踊り手の後へ二列に並び、踊り手の動作に合わせて唄い始めます。唄い出しを間違えると踊りにくくなり拍子がとれません。特に両側の親太鼓にしっかり教えておかないと単調な踊りのため揃わなくなり、踊りにくくなります。かえしになると両側の親の立場が変わってくるので大変むずかしくなりますが、踊り慣れた人であれば、自然にリズムがとれて踊りに合わせることが出来ます。

過疎のため踊り手が少なくなり、消防団員が踊った頃もありましたが多忙のため続かず、一時は保存会も中止した時期もありました。しかし郷土の伝承文化として道谷小学校で取り上げて頂いたので、伝統は無事受け継がれ地区の人たちは大変喜んでおられます。

昔は、毎年八月一日から八月十五日迄ずっと練習をしました。しかし八月十三日だけはお盆で精霊迎えの日ですから一日だけ休み、八月十六日が本番で踊ります。練習はきびしく、叱られながら一生懸命覚え込みます。左利きの人は、右利きの人に合わせるのに苦

労されました。現代ではあの頃のような練習は出来ないといわれます。

八月十六日は神仏にささげる踊りですから、氏神様の境内で踊り始め、それぞれのお宮様から愛宕さん、地藏さんと踊ってまわり、日暮れから十一面観音さん迄踊って行き、村中を踊ってまわり六時頃になると約一時間夕御飯の時間をとり、最後に区長さん宅の門前で踊ります。九時近く迄踊り通し、その後は盆踊りとなり夜中迄踊ります。このように長時間踊りますと汗だくになりますので、昼間は緋の着物を着て踊り、夜間は浴衣に着かえて踊ります。下駄も相当擦り減ります。

ザンダカ踊りの歌詞は現在十七番迄唄いつがれておりますので紹介します。

一、門開き (ザンダカ)

ヤア門の開きそえ 開きは戻る

ヤ 差いたる太刀に露が降るソリヤ

露が降るサエ

ヤア差いたる太刀をば袖でもかくす

乗りたる駒に露が降るソラ露

が降るサエ

ヤ 我が国で 参貫三百した金を

若狭の小浜で五貫五百したものの

ソラ したもの ヤ五貫五百も

した金を 敦賀の国では九貫九

百したもののソラ したもののサエ



二、宝踊り (カッカラ)

ヤ 此方の御庭に踊りが参る

ヤ 一の門開き 二の門開き ヤ黄

金の門を打ち開きイヤ 宝ヤ踊

商召されて御目出度や さて

その後にはお戻りあり四方 にか

四万の蔵立てて ヤ 十四と十

五は二つふうまかのソリヤ 二

つふうまかのサエ

りヤ一踊り

ヤ 此方の御庭で踊ろうとすれば

ヤ黄金小草が足にやもつれて踊

られぬ イヤ宝踊りヤ一踊り

ヤ 乾の隅の三段榎 元銀の中黄金

イヤ末には銭がなり下がる イ

ヤ宝ヤ踊りヤ一踊りヤア その

又銭をたすきにや掛けて ヤ黄

金の枡で銭はかるイヤ宝や踊り

ヤ一踊り

三、鎌倉踊り (ザンダカ)

鎌倉の鍛冶が娘は 日本で一のお手
きき 五つでは糸をよりする 六つ
では布機たてする 七つでは綾をし
始めて ヤ八つでは錦を立てす 九
つで恋をしそめて ヤ十では殿御と
寝初めた 十一で伊勢に詣りし 十
二で熊野に詣りするそれ程の歌の数々
何とて後生にはなるまい

四、早船踊り (カエシ)

ヤ一俺の殿御は今年始めて早船を召さ
る ヤ一ア丹後街道はよかけまい
ヤ一軟風ようて船さえ揃えて ヤ
丹後の沖を乗り抜けて ヤ一ア若
狭の小浜に着いたとの ヤ一船の
上乗り誰々と ヤ新七小太郎上乘
りて ヤ後藤が島に船つけて ヤ一
昼は追いの風を待つヤ一夜は七つ
の星を待つサエ

五、籠の鳥踊り (カッカラ)

此方に参りし籠の鳥 見れば
イヤ鶉を雲雀に友鳥入れて
イヤあら面白の籠の鳥ヤ一ヨ
ジュン一
御庭に上がりし籠の鳥見ればイ
ヤ鶉と雲雀に友鳥入れて
イヤあら面白の籠の鳥ヤ一ヨ一
イヤ

あら面白の籠の鳥ヤ一ヨ一ジュ
ン一
御縁に上がりし籠の鳥見れば イ
ヤ山雀 小鳥友鳥入れて イヤ
あら面白の籠の鳥ヤ一ヨ一ジュン
おでいに上がりし籠の鳥見れば
イヤ小鷹の巣下ろし籠にや入れて
イヤあら面白の籠の鳥ヤ一
ヨ一イヤ
あら面白の籠の鳥ヤ一ヨ一ジュン

六、浅川踊り (カッカラ)

ヤア十七八が イヤ浅川渡る ヤア我
妻なれば ヤア負い渡す ヤ 抱
き渡す ヤ一先ず負い渡す イヤ
抱き渡す ヤ一あの山影が ヤ無
いがさて ヤあの山影に ヤ一若
し人居らば ヤア此方の 恥辱ヤ
俺が恥 ヤ山寺稚児の ヤ氷室の
露も ヤ嵐が吹かば ヤ落ちご落
ちご

七、ひんだ踊り（カツカラ）

ヤ ひんだの横田のゆのせきで ヤ
ぞんぶりぞぶりと植え田を ヤ
今来る嫁には刈らしよかな ヤ
腹立ちゃ ヤ今来る嫁にはうら
めしや ヤひんだの踊りは一踊
り ヤ一踊り

ヤ ひんだの細道物凄や ヤ笠にゃ
木の葉が降りかかる ヤ散りか
かる ヤひんだの踊りは一踊り
ヤ一踊り

ヤ ひんだの横田の加賀の瀬で 汲
んだる水で影見れば ヤ良い女
子 ヤ我身ながらもしほらしや
やしほらしや ヤひんだの踊り
は一踊り ヤ一踊り

八、御屋敷踊り（カエシ）

此方の御屋敷を今こそ身たれ
イヤ乾の上りに南の下り イヤ
今こそ此家の イヤ世盛りよ

イヤ今こそ此家の イヤ世盛りよ
ヤア此の築地は銀築地 ヤ南の築地は
黄金の築地 ヤア表柱を見てやれ
ば ヤア六十六本お建ちある
ヤ一垂木ばなには 金打ち伸ばし
空をば松皮八棟 ヤ空をば松皮
のせぶき ヤ空をば松皮よせぶ
き

ヤ一おでいの内を眺むれば 銀のお
手槍が百すじと先ず見えし 百

すじの槍を見るさよ 見事な

ヤ一かぶと百羽 百羽のかぶと見る
さよ見事な ヤ白糸具足が百す
じ 百すじの具足見るさよ見事な
ヤかのこうつぽが百ほの



百ほのうつぽ見るさよ見事な
ヤ白木の弓が百丁の百丁の弓を
見るさよ見事な ヤ金覆輪の太刀
が百振り ヤ一太刀が百振り

百振りの太刀の目抜きと見るより

も ヤ一せみやせじょうや笠
にゃ八代菊 ヤ笠にゃ八代菊

九、若狭踊り（ワカサ）

ヨ 若狭にヨ上ればヨ津山がヨ見え
よる ヨ津山にヨ上ればヨ石岳
をヨおりる ヨ真実召されてヨ
彼は誰の ヨ千石ヨ抱いてヨ梶
をばヨ取れど ヨ大事のヨ人の
ヨ小娘をヨ誰がヨ寄せてヨ
抱いてねた

十、親方踊り（カエシ）

ヤ一親方様は出雲の虎を攻めるとて
ヤ一改造船を千隻揃えてお待ちある
ヤ一親方様は出雲中を切りしめて
ヤ一今我が国お帰りある ヤ一国
に帰りしお祝に ヤ因幡の国の
親方様と ヤ但馬の国の親方様
と ヤ筑紫の国の大仁殿と ヤ
参賀召されて名馬揃えておひき
ある ヤ一先ずも揃えておふき
ある

ヤ一親方様の御召馬の毛の色は ヤ
連銭茸毛に虎月毛 ヤ一毛性皮
原毛雲雀毛月毛 ヤ一なるとた
けともこれも館のお馬なりヤ一
これも館のお馬なり

十一、鐘鑄踊り（カエシ）

明日は又都に鐘鑄が御座る 皆

国々に イヤ高札立てて イヤ
鐘鑄の勧進を召されるとの 皆
国々に イヤ使者をば廻す イ
ヤ皆好きずきに イヤ御参りあ
る ヤ一鐘も沸きする澄みたぞ
や ヤ大工職 ヤ御休みあれ宝
踊りは一踊り ヤ一踊り 鑄
たてた鐘の イヤ撞き初めを誰
が イヤ出雲の国 イヤ鑄師が
小娘を

十二、加賀踊り（カエシ）

ヤ一加賀の国の絹宿の ヤ娘を一人
持たれしが ヤ一京に上せし縁
につけふ ヤ都によせし縁につ
けふ ヤ京の五条の室町のヤ一
油小路の善九郎が ヤ一婿にな
るとて打ほれた ヤ一妻にな
るとて打ほれた ヤ一妻にな
るとて打ほれた ヤ一さて加賀
からの上る土産を見てやれば
ヤ一五尺三寸長刀 ヤ一八貫目
抜を巻きこめて ヤ三貫下緒を
より下げて ヤ一婿の頼みと上
りする ヤ一成就刀にさせよと
て サ一サエ ヤ一さて京から
の下る土産を見てやれば ヤ一
拾九つ糸のもの ヤ一気合上中
御取揃えて嫁の頼みと下りする
ヤ一まずも揃えて下りする
サ一サエ

十三、鳥帽子踊り（カエシ）

ヤ一牛若君は夜の間元服せばやとて
ヤ一宿の下女を近づけて

ヤ此の宿に ヤ一鳥帽子折りは
無いかとて ヤ一御問いある

ヤ一宿の下女の申ししは ヤア一あ
れに見えし竹のまがりのその内
に ヤ一五郎太夫と申ししは

ヤア都に聞えし鳥帽子折り
ヤア牛若君はそれをつくづく御覧じ

て ヤア竹のまがりのその内に
ヤ忍び入り ヤ一鳥帽子所望と

申ししに ヤア五郎太夫申しし
は ヤア左折るか右折るか ヤ

ア左に折りて召給え ヤア五郎
太夫の申ししは ヤ一左折りを

召す人は ヤ一條殿や二條殿
ヤ平家方では小松殿 ヤア鞍馬

の寺に在わします ヤ牛若君よ
りその他は ヤア左折りをば ヨ

召すまい

十四、松尾の城踊り（カッカラ）

アラ面白の イヤ松尾の城や 木杵
の浜を ヤ見下いた ヤ先ず見

下した イヤ木杵の浜を ヤ長
柄の柄杓 ヤ傾く片手 ヤ塩を

汲む ヤア十七、八が イヤ機
織る姿 ヤおい竹へ ヤ竹への

おの小竹 ヤ契りを招く ヤお

さ七つ ヤ十七、八が イヤ夏
片びらで ヤ布織る姿 ヤ後に
低くヤ枝垂柳 ヤ前にはよせて
ヤ織る姿 ヤ織る姿

十五、御寺踊り（カエシ）

ヤア寺に詣りし御庭がかりを眺むれ
ば ヤア諸国一と先ず見えし

ヤ一日本輝くその寺の ヤ一桜
色なる稚児恋し その又寺の

イヤ御長老の出たち イヤ千貫
衣に九貫のけさで イヤ内には

みだの イヤ光さす ヤア内に
はみだの イヤ光さす ヤアさ

て仏壇を眺むれば 参り衆が千
人 参り衆が千人 イヤ下何衆が

千人 イヤ日に三千の イヤお
参りある

十六、都踊り（カエシ）

ヤアここは都の津で御座る 皆人の
小娘達が明日は花見の寺参り

ヤア稚児の出たちに目がくれて ヤ
降りられ前のきざはしを サ一

サエ 寺に詣りし御椽がかりを
眺めれば ヤア小鳥 籠鳥 掛

け並べての ヤ一唐のかんすを
かけられた ヤアおでいの内を

眺むれば ヤ高らいべりのお畳
を ヤ一うるこ重ねに敷き並べ

ての ヤ一唐の若い衆は数もな



し ヤ一唐の若い衆は数知らず
サーサエ ヤアさて仏壇を眺む
れば ヤア黄金で延べた押板に
ヤ獨鉦三鉦打つの花々鈴錫杖
ヤ獨台天目天台硯 筆墨紙に唐

十七、御庭揺（ザンダカ）

ヤ 白鷺が 御門の上木に巢をかけて
ヤ如何なる闇でも月と輝く

ヤ 宮川の ヤ一深き底なる白砂を
袖も濡らさず取るが不思議な

ヤ 金箔さいて扇に紙を取揃え
ヤ 諸国の宝を ヤ一誰が取るや

ら ヤ 皆一門に白管笠で し
でを切りかけ御庭をゆるのが見

事な
ヤ 御庭に名残りは惜しけれど ヤ
明年参りて又踊る ヤときの声

は聖文じゃ

この歌詞は長いので途中を抜くことも
ありますが、十七番は必ず唄い、とき
の声は聖文じゃとうたって来年につな
げるようになっております。

《第四集所載》

のかけじを三幅一切らいしゃ打
つのもすり花々を御取揃えてお
掛けする

建て替えられた西之堂

河野 トミエ

西之堂は、波賀町齊木字前地のほぼ中央の前田優さん宅のそうめん工場の上にあります。

昔より齊木奥地区の守護神として村人の安全を見守って下さり、地域の人々の信仰の場となっております。

この西之堂については、昭和六十一年発行の波賀町誌や平成三年に発行の波賀町ふるさと文化財第二集に詳しく載っておりますが、この程新しく建て替えられました。

去る平成十三年十一月二十五日安養寺のご住職に落慶法要をして頂き小さいながらも白壁の立派なお堂が竣工致しました。

謂われは、町誌や文化財史に載っておりますように、昔齊木墓坂峠の上に白雲山日光寺というお寺があり、その寺の分堂としてここに建立したとあります。

中央の像は、寛政六年（西暦一七九四年）頃に建てられ、火伏尊蔵の地藏菩薩が祀っており、非常にあらたかな仏像といわれております。途中に一度像が塗りかえられていると記されています。左右に毘沙門天と不動明王が祀っ

てあります。

昔は近くの人達が念仏をとえながら大きな数珠を廻す数珠廻しが行われ



ていたそうです。その数珠が今でも置いてあります。戦争中は出征兵士の家族の人達がこの堂におこもりをして武運長久を祈念したり、又早ひやくの年には雨乞いの祈禱なども行われていたそうです。それ以後は子供達が自治会活動の

場としていました。

春のお大師様の日にはお接待などもあったそうです。

最近では長年の風雨に建物も傷み周囲の板ははがれたり、屋根も壊れて雨もりがするようになっていましたので、前地区の者によって新しく建て替えることにしました。

お堂の前には大きな自然石の供養塔が立っていて、足の痛いお年寄達もよくお参りされております。

安養寺住職さんのお話によると、最近では各地区でも地域の小さなお堂が多く建て替えられブームになっているそうです。

昔から伝わってきた信仰の場が形を変えつつ今なお村人の安全を祈願したり、人々のふれあいの場として引き継がれております。

この西之堂の管理は先日前地の総会があり水道当番が月毎に掃除をすることが決められました。隣保でのお大師講などもこの堂で開いております。

《第九集所載》



亥の神

中谷こめ

農家では亥の子をお祀りするといひ、五穀豊穰を願ひ、又感謝の意味で春の亥の子は出て働いて貰うので、三月一番の亥の日に朝、お餅をついてひと重ねお供えしました。下段には白のお餅、上には小豆のあんをつけたのをのせて亥の神様にお供えます。

秋の亥の子（収穫時）にはその年取れた新米で朝お餅をついて夕方お供えをしていました。

十一月一番の亥の日ですが間に合わない時にはおはぎ、又は小豆ご飯でお祀りして、次にお餅を作って小豆のあんの付いたのを上にのせ一重ねお供えをしていました。

床、神棚、カマ荒神様、道具の神様等、小餅をお供えして秋の収穫を感謝していました。

十二月

おとご朔日ついでち

カラスが鳴かない間にナスの味噌漬けを食べる日とかいって母が朝早く味噌漬けを食べさせていました。

八日は八日待ちといって、豆腐、油揚げの入った味噌汁を作って食べていた。

そのお汁のおいしかったこと。

十三日はすす掃き

年末の大掃除、すす払い

すす払いの竹を切って来て、その竹を残しておき、とんどのお餅をあぶるのに使う。又団子を作って神様にお供えをし、団子汁を作って食べるその団子汁は又、格別においしかったと思ひ出されます。

冬至

カボチャを食べる、柚子湯に入る。

大晦日

各商店の支払を済ませ、年桶を祝いこみ、しめ縄を張って正月を待つ年酒を祝う。

こんなことをしていました。

《第十集所載》

